

深
延
房
輯
近
世
紀
聞

二
編

自文冬
至同年秋
辰春

卷之一

113
530
4

10 15 20 25 30

條野傳平輯
鮮齋永濯畫

凌蒙近世紀聞

島氏藏版

近世紀聞第二編序

大正十五年二月
花房仙太郎氏寄贈

野客叢書云朱子近死者多赤々
墨小近きものハ黒しと僕年来墨池
溺れ多し兒戲ヲ策子我綴れ事今に
至る今三四十年来常々昨非を悔ゆると
雖も尚泥中我離難を得以て
深死乎 沈免るを以て遂に生涯の方嚮を

失せり適書賈の需に應じ今此編輯
 闕卷を補形しよ今海に續集の存ん支を
 請ふ這々那に架空の辨成り今其類稗史
 小説純屬にあり其深淺謹んで彼を参し
 惶み多是を考ふ其に書毎に異同を記を
 得て一犬爰に虚を吠る時群犬聲を吼
 如き誤りなきに空すんりし源素ら
 井蛙の見成り今取捨幣にも又嗚呼如
 ども然と今止むる支を今孫バ次編三卷を
 抄出さし多識者此叱言を竝つ支志の里
 干時明治七稔立春後三日梅花半開
 頃筆を戲墨堂純南窗に採りて

東京雑逸遊

深崎延房誌



大樹及び諸
 國に於ては
 闔國に於て
 登京せし
 らるる多し
 中洛外に於
 ち繁榮の代
 未聞の圖



三上巳月
 二編卷二

三上巳月
 二編卷二



其二

近世紀聞二編卷之一

東京

深崎延房輯

○浪徒蜂起して薩長大に周旋する支

時既^{とと}に文^ぶ又^{また}二年^{にふたとし}睦^{むつ}月^{げつ}中^{ちゆう}五^ご日^{にち}に至^{いた}りし此^{この}日^ひ八月^{はつげつ}次^{つぎ}の
登^{のぼ}城^{しろ}とく在^あ江^え戸^との大小^{おほいせう}名^な各^{おのづか}營^{えい}中^{ちゆう}に伺^{うかが}候^{こう}せりれ供^{きよ}待^{まち}に
鎗^{あし}狭^{せま}箱^{はこ}を咸^{みな}下^{くだ}馬^ま先^{まへ}に充^み満^みせり別^{わか}く閣^{かく}老^{らう}参^{さん}政^{せい}する
例^{れい}刻^{こく}の太^{たい}鼓^こは合^あ図^ずに同^{どう}登^{のぼ}營^{えい}の如^{ごと}く第一^{だいいち}番^{ばん}の
父^{ちち}世^よ侍^し従^{じゆう}引^ひ續^ついそ安^あ藤^{とう}侍^し従^{じゆう}の稍^{さう}坂^{さか}下^{した}の城^{しろ}門^{かど}近^{ちか}く
列^{れつ}隊^{たい}正^{ただ}して前^{まへ}より時^{とき}何^{なに}處^{ところ}より小^{せう}砲^{ぱう}一^{いつ}發^{はつ}安^あ藤^{とう}侯^{こう}に打^{うち}

蒐^ひ一^よ其^ま彈^{たま}丸^{まる}輿^こ側^{がわ}の衛^ゑ士^しは當^あり^ま駕^がり^まの恙^やな^しと
 雖^も衛^ゑ士^し等^ら大^{おほ}り^ま驚^{おど}愕^{おど}して隘^せ者^{もの}なりと言^いふ間^まも
 く忽^{たち}地^ち浪^{なみ}士^し六^む七^{しち}人^{にん}突^つ然^{ぜん}と頭^{あたま}れ出^で輿^こを目^め掛^かく暴^{はつ}撃^{げき}を
 まりぞ衛^ゑ士^し等^ら是^{こゝ}に立^た對^{たい}ひ^ま姑^{なほ}く防^{ぼう}戦^{せん}及^{およ}ぶら安^あ藤^{とう}
 疾^{はや}く遠^{とほ}く駕^がり^ま自^{みづか}り^ま躍^をり出^で逃^{のが}れ去^さらん^と為^なす
 所^{ところ}浪^{なみ}士^し一^{いつ}個^この浪^{なみ}士^し屹^{げき}と見^みて汚^{よご}し返^{かへ}せと喚^{こゝろ}り^ま逐^お蒐^そ来^き
 り^ま肩^{かた}先^{さき}へ僅^{わずか}く一^{いつ}太^{たい}刀^{とう}砍^きり付^つく衛^ゑ士^し等^ら駭^{おど}き支^し
 隔^へさ猶^{なほ}抗^{かた}戦^{せん}及^{およ}ぶ程^{ほど}此^{こゝ}間^まは安^あ藤^{とう}疾^{はや}く坂^{さか}下^{した}門^{かど}に
 馳^か入^いり^ま浪^{なみ}士^し等^ら望^{のぞ}み^ま矢^や失^しひ^ま是^{こゝ}迄^{まで}思^{おも}ひ^ま
 咸^{みな}討^う死^し遂^す一^{いつ}と言^いふ這^{こゝ}の前^{まへ}編^{へん}に記^き載^{ざい}せ^し三^{さん}島^{しま}二^に

郎^{らう}兵^{へい}衛^ゑ等^らの六^む人^{にん}外^{ほか}は水^{みづ}府^ふの浪^{なみ}人^{にん}内^{うち}田^た万^ま之^の助^{すけ}と
 喚^{こゝろ}り^ま者^{もの}彼^か三^{さん}島^{しま}等^ら荷^か擔^{たん}して俱^{とも}に襲^{おそ}撃^{げき}為^なり^ま奈^{いか}何^な
 ら其^{その}場^ば矢^や砍^き抜^ぬたりけん長^{なが}列^{りつ}家^けの藩^{はん}郎^{らう}外^{ほか}禮^{れい}田^た多^たる学^{がく}
 校^{がう}に赴^{おもむ}き^ま藩^{はん}士^し桂^{けい}小^{せう}五^ご郎^{らう}に對^{たい}面^{めん}を^し姓^{せい}名^な張^{ちやう}告^こ知^ち来^き由^ゆ
 矢^や語^ごり死^し後^ごの取^と置^ち依^い頼^{らい}して躬^{かみ}く自^{みづか}殺^{ころ}を遂^す一^{いつ}とぞ
 小^{せう}五^ご郎^{らう}素^すより万^ま之^の助^{すけ}と一^{いつ}面^{めん}識^しも多^たる者^{もの}なれど渠^{なほ}桂^{けい}
 氏^しの雷^{らい}名^な張^{ちやう}听^き及^{およ}びた^り故^{ゆゑ}張^{ちやう}の如^{ごと}くをせ^しま
 る^{べし}是^{こゝ}に先^まに坂^{さか}下^{した}に戦^{せん}死^しま^りたる浪^{なみ}士^し等^ら
 死^し骸^{がい}張^{ちやう}點^{てん}檢^{けん}せ^し處^{ところ}斬^{ざん}奸^{けん}趣^す意^い書^{しょ}と記^きせ^し書^{しょ}張^{ちやう}各^{おの}一^{いつ}
 通^とつ所^{ところ}持^もたせ^しり最^も長^{なが}文^{ぶん}多^たる故^{ゆゑ}其^{その}大^{おほ}意^いを縮^{ちぢ}文^{ぶん}

近世系聞

二為卷之二

五

せーものを爰に記して曰安藤閣老故井伊元老の意
 紙受け夷狄親昵一遂に酒井所司代と謀り正議
 の緝紳家と幽閑一幕威を以て皇妹紙閣東よ下
 一甚したるに至りて天子の廢立謀らんと和学
 者一命一廢帝の例紙引く等罪戾言ふに堪えざる
 者ゆり故に臣等命を抛ち奸邪を殺戮せんとす
 此他三島三郎兵衛が懐中堀織部正が憤死の旨
 趣紙奉たる此書一通ありとぞ時三郎兵衛十九
 歳に躬若輩なりと雖も故主の遺命紙忘るる莫
 なく斯る一挙に及びしと終に機會を失ふ素
 懐紙遂に能くさふち又是謂はる莫しし櫻田乃
 變在る後安藤家もも豫防あり陰供と号し
 路次一警衛に紙置たる浪士等あるを知らず
 一途に襲撃せし故に空しき最期紙遂たりとを
 云ふ然れども渠等が奮戦も並々ならずぬ働た形
 りん安藤侯の衛士に於ても其場は重傷紙被る者最
 も多しと云ふ後安藤侍従もも竟に退職せらるる
 逮へり憊へ二月十一日和宮東城に於て婚姻の大禮在ら
 せられ御臺所と称せし後謂はる和宮と復稱
 せり今総正月元日春日第四社の神鏡自ら落る破

近世紀聞

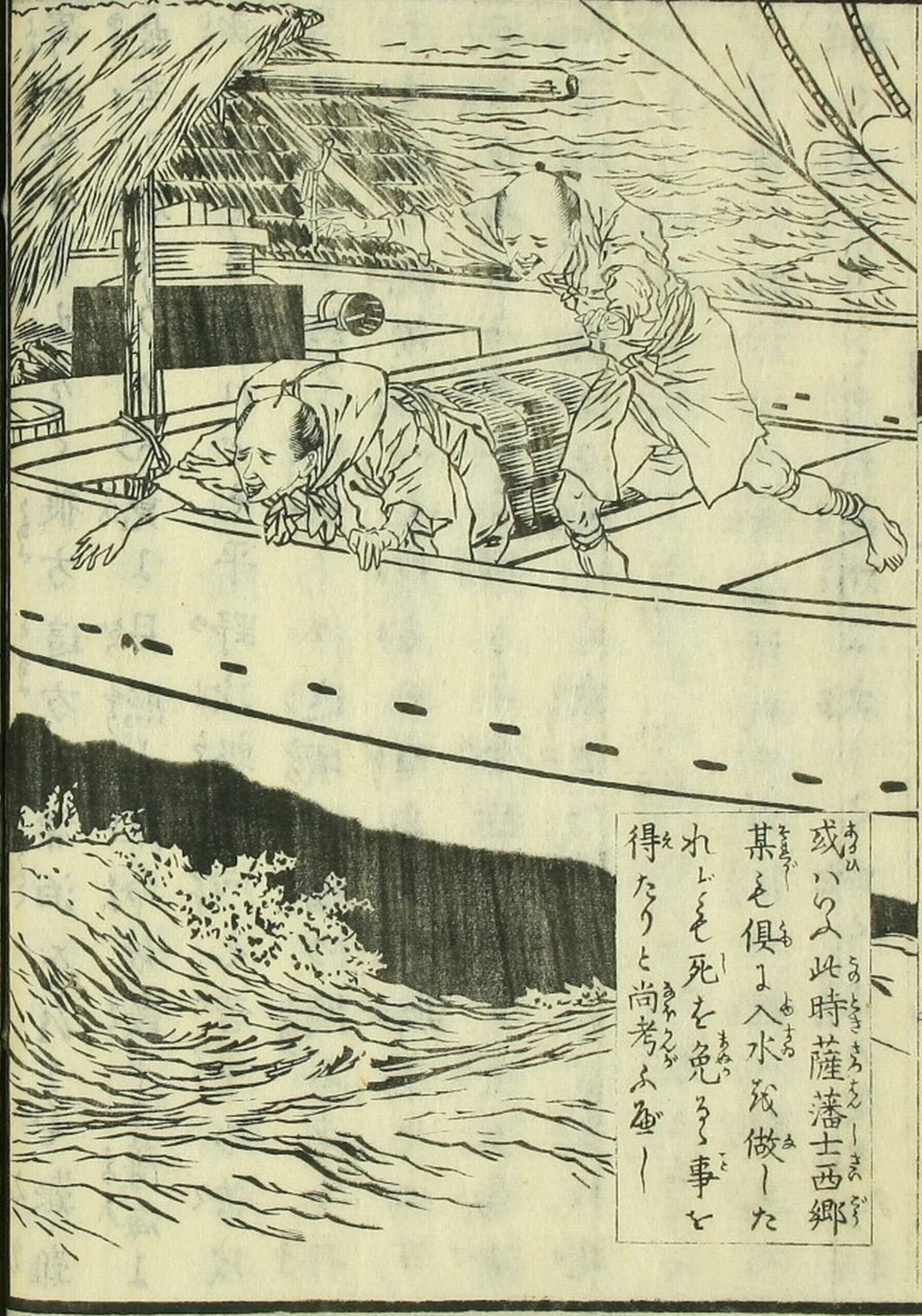
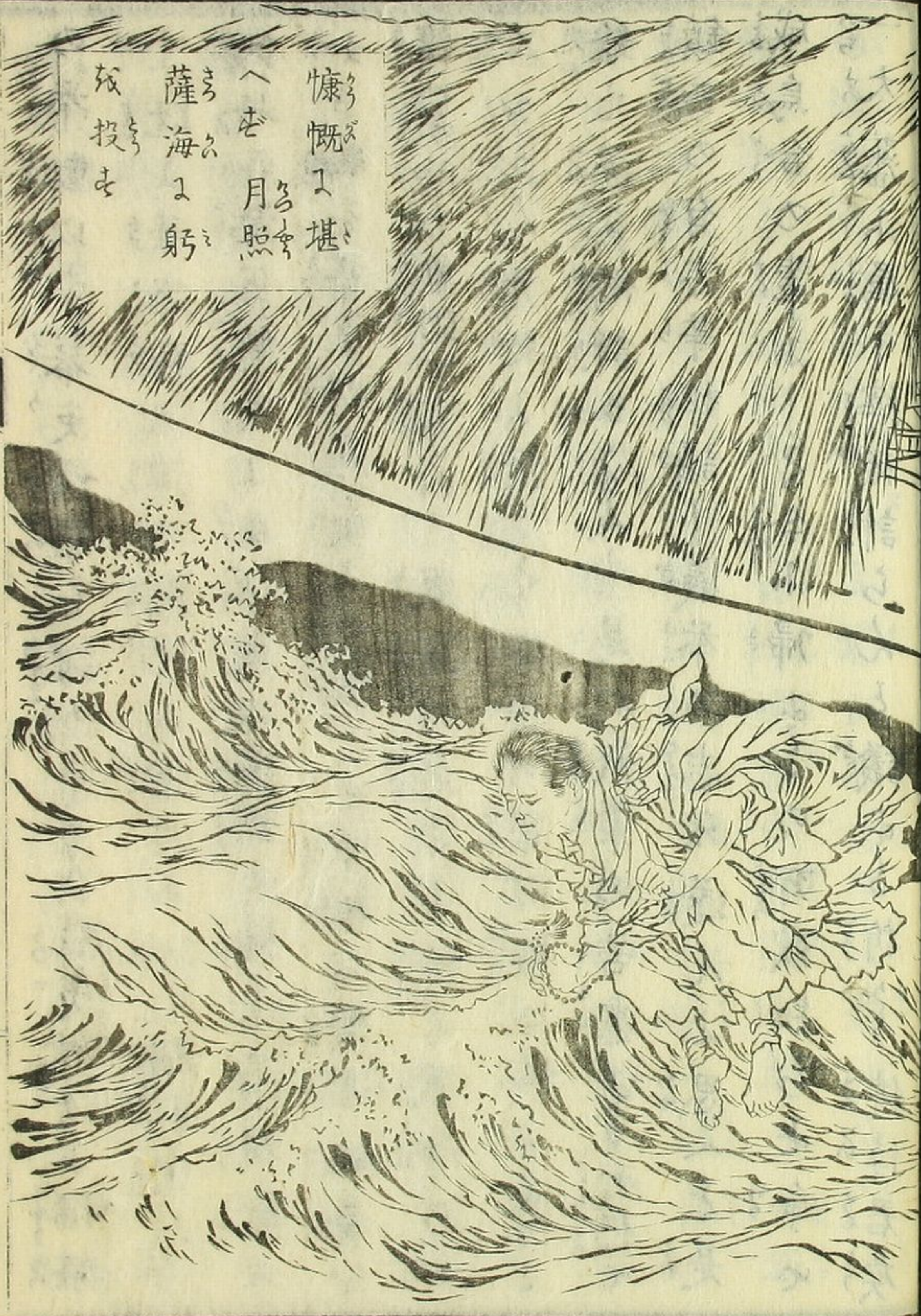
二編卷之一

五

裂せし三月四日同所第三社の神鏡又自りり落
たり此旨社人より奏せしに仍る陰陽頭安部朝臣
晴雅の命トくトせしめ春日へ奉幣杖捧げ給へり
茲に筑前の藩士に平野次郎と喚る者あり當初外
艦渡来せしより國體杖失せん杖憂ひく尊攘の志
遂んと去る戊午年國杖脱して姑く京師に滞留
し粉骨碎身力を竭し同志の者杖荷擔ひし其
頃幕威熾んし草莽の徒杖探索する最も嚴
密なるが故に幾内は足杖止めがく同志清水寺の
住僧成就院月照と俱に難杖西國小避ると雖も躬を

寄るべき方もなく彼方這方と漂泊するも難
憂苦に堪ざりらん竟に月照と薄命杖歎して薩海に
身を投せり然れども平野次郎は尚も苦中の苦杖
忍び所々小姑く僭居し頃頃撰播の間小来り再
度尊攘の説杖唱へく四方の有志杖鼓舞し二百
餘名杖獲るふ及べり然る小今稔四月に至り島津
和泉修理大夫茂久実父自國を發し東武へ趣んとするの途
中播州姫路に著せしと聞き次郎自ら巨魁とありて
二百餘人の浮浪の輩島津氏の旅館の裡へ群鳥の
如く馳集りて書杖泉州に虫しと曰く去る癸丑嘉永年

懐
 慨
 入
 堪
 へ
 在
 月
 照
 薩
 海
 入
 躬
 投
 去



或
 此
 時
 薩
 藩
 士
 西
 郷
 某
 也
 俱
 入
 水
 死
 免
 事
 得
 考
 一

二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

の挙動以来幕吏國體を謬りしより黠夷漸次猖獗
 一既一華庫塙三津の開港も當月ふしと期約満たり
 尙此三港を開くも及ぶ夷人商館と號しる城郭の
 如き物を築き群虜爰も屯集して軍艦を繋ぎ礮臺を
 構へ水陸の要路を塞ぐ 鳳閣の危きと恰も累卵の如
 くありん 开処に至りて攘夷の策を施さんとあると
 雖も遂に術計なるべし是れ我輩の苦慮ある所仍て
 鎮西の有志等相議し義舉の志を遂げんと思へど是
 咸烏合の輩ふしと今ふ歸するの所を知らざる争ひ
 一大藩小属し緯を計らんと議する折る僥倖君侯

の通駕を听得し欽慕し堪ば推参せり適れ公の英
 断より仍て幕議を受る處の縉紳家の幽閑を解き大坂
 彦根二條の三城を同時し拔る令を七道の諸藩へ
 下し 皇駕を函嶺小奉しと以て幕府の罪を問ひ
 給ひ速し洋夷を掃攘せさんと次君侯臣等が微意
 を憫み至急し奏し給はん 皇駕を冀望せりと書載
 せし泉州渠等が暴舉を聴く心中竊り小患ありと
 雖も勢ひ黙止難き故し志願の肯を領養しその
 徒を残らば相俱しと伏見をさしと登られける此
 時筑前の太守も東武へ参勤ありんとし 既に播州

大倉谷迄東駕せりし一赴を平野次郎ハ傳へ所
き基あはれ奮主あはれ故一這回の一挙を告知し
俱ニ奮發ありしめんとなし旅館ニ到りし緯愆々
と演説せし君を後始りて百般評議と凝ら
されしが奈何ある深慮の在るあや次郎が當初國
罪を犯したりと言ふと名として忽地ニ是を捕縛し
疾ふも東向坂禁りし其終ニ歸國せられ次郎と國
ニ引連りし獄舎ニ下りたりとあはれ伏
見奉行林肥後守の這回播州姫路ニ於る鳥合の
浪士數百名島津泉州ニ就き暴挙の企むるの赴き

疾くも傳承為たりし一駭數最も慙々しび至急ニ
使派京師ニ馳り所司代酒井若州ニ告ぐ若州も又
驚愕せしと在京の幕吏等悉く集り報知の旨趣を
譚りし既ニ斯くの如くんば何時島津泉州が鳥合の
浪徒を引率して京師を襲はんも計り難きふ準備なく
しと慚をばとて咸甲冑ニ躬を堅め二條の城ニ楯籠
りて晝夜防禦の軍議ニ及び又 朝廷へも倘浮浪の徒
暴説を唱へ奏聞做んも計り難し其節必お驚動せし
と卒尔の御所置御座あるとて波縦ひ粗暴の挙
動まとも臣等一國の力と竭し且各藩の警衛を指揮

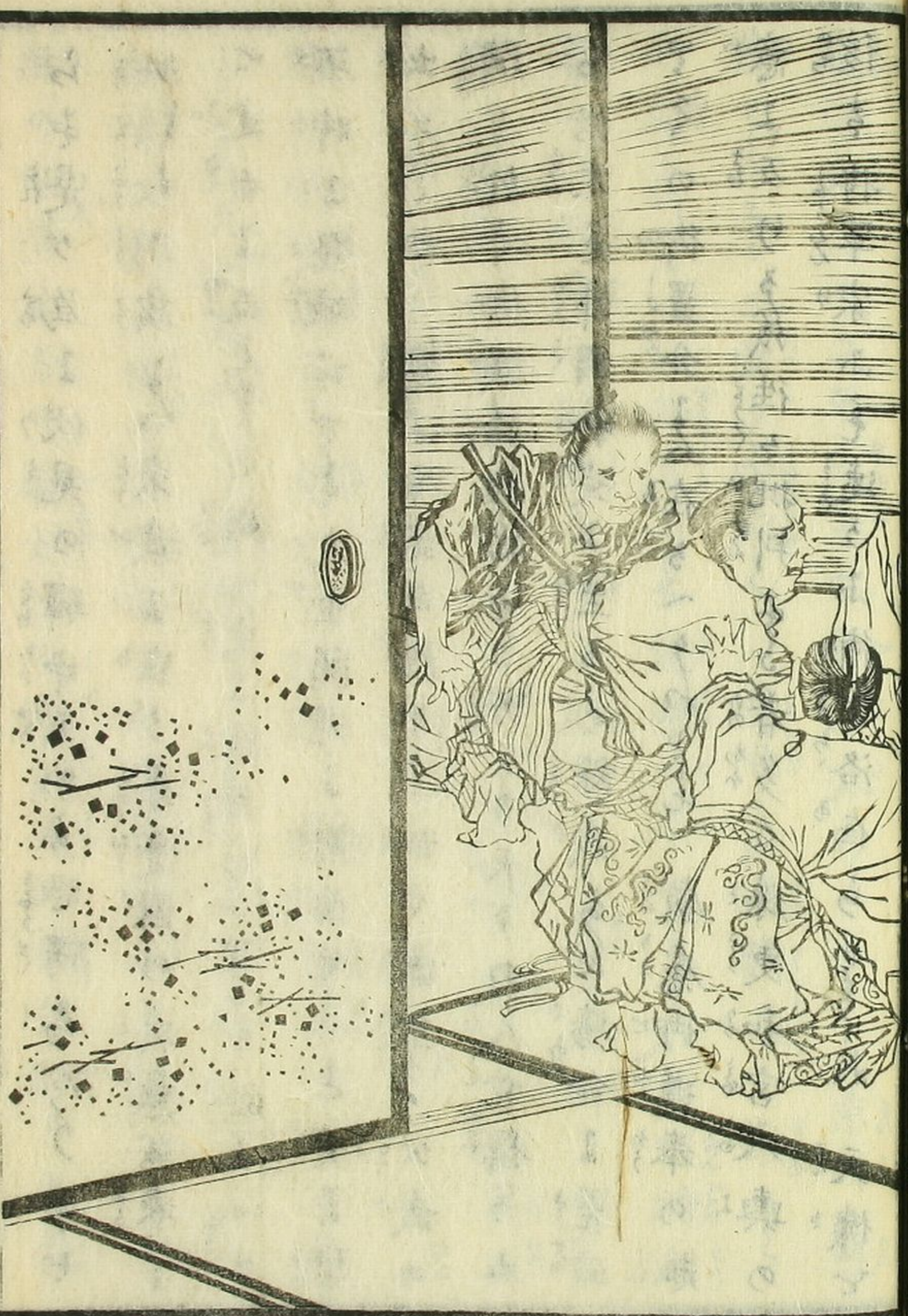
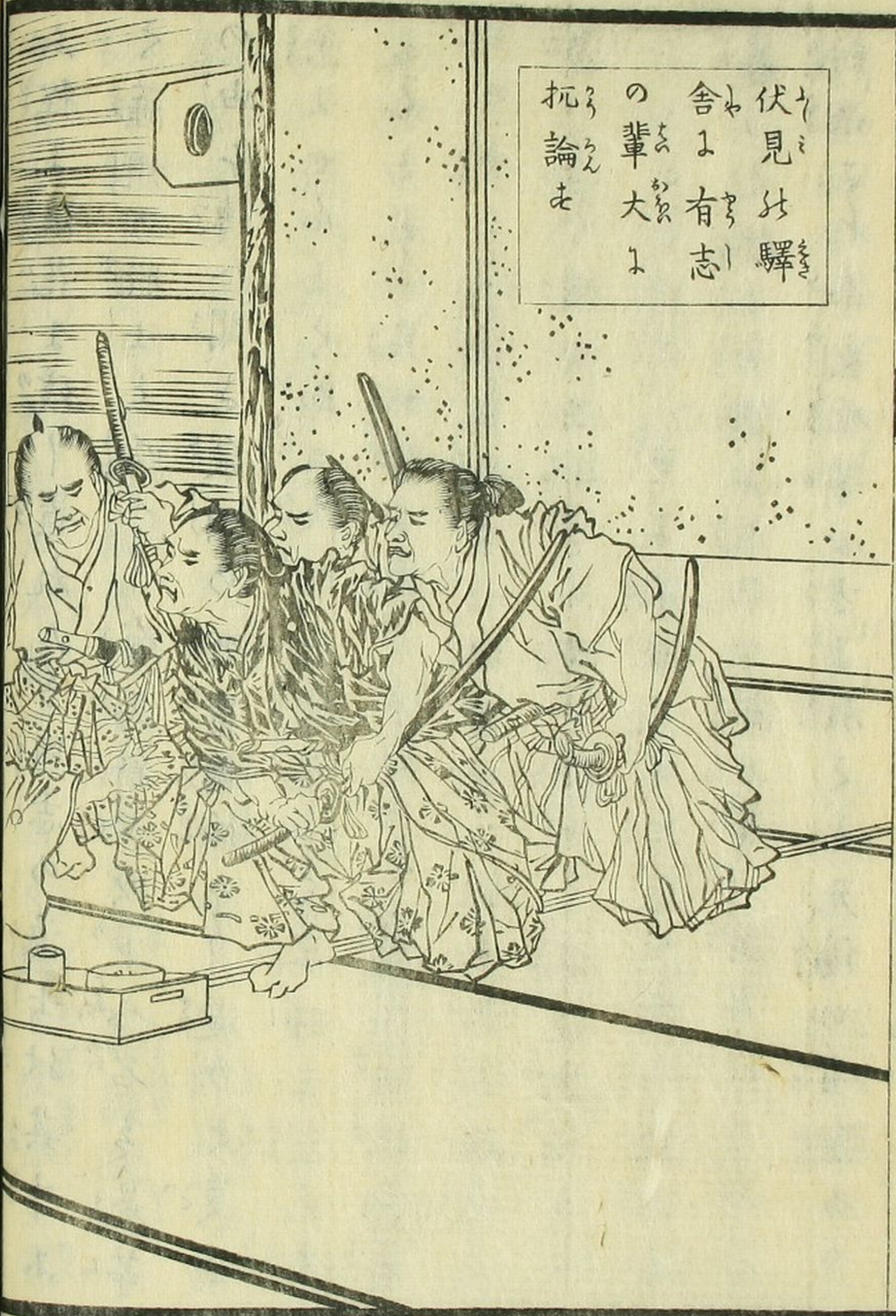
去る誅伐致次べきの旨傳奏廣橋議同成卿坊城亞相
 俊卿をしく即時に奏せしむるを是に仍る市街の
 騷擾余るがう鼎の沸が如く今も都下は兵乱起
 りて忽地焦土とふるべき杯言雖も又憶ひ僻め或
 ち家賊と東西に運び老幼南北に奔走を狼狽大
 めてあつざりたり程に島津泉州の浮浪の輩ハ總
 と咸大坂伏見の両所を禁止其躬の從者のを以
 引俱に此月の十六日徐々に入京のり馳之近衛
 家と参殿しと拜謁の上稟さるやう幕府去る午年
 以来勅諭を遵奉せば外夷は通商條約に刺へ正義

の親王及び三公を始りて尾水越等の諸族を素
 よて其他有志の輩と或る幽死流一暴政日
 日小募る族以て閩國の人心紛乱を尊王攘夷と
 主張するの浪士等慷慨激烈の説を唱へ大老と刺
 夷人を戮せり仍と幕吏等嚴密に浪徒を會議倣
 が故に渠等弥奮發しと容易さるざるの企に及ぶ
 べきやの聞へり就る騷亂の基とあり勤王の
 趣意殆失ふのみうの却つて外夷の術中を陥り恐る
 ざるの一大憂に立至らんと思慮を込めて這回東
 武に出府の上此旨建白の含まらるる姫路驛迄登り

処浪士多人数群参し微臣は依頼ありて処箇様々々
恁々より緋を暴挙ふ似たりと雖も報國の素志あり
よゆゆ糸を黙止難き所もゆは伏見驛迄召俱し来
りて彼所は後せ置たりあり委情ハ書中ふ具たり
空しく朝議は仰ぐよとそとそ彼の次郎等より
遞與せし処の一通の書は呈されば近衛殿も駭ら
ると共旨議奏衆は以て即日奏聞せりとし一り
敵慮甚だ安らうと泉州姑く滞京ありて諸浪士の動
乱は鎮め守内の静謐を計らふを旨 勅諭は被ら
りしを泉州 敵旨は奉載せりとし数日在京に及

ふ程は浪花に残り置れたり同志の浪士は其中ふ
と薩州の脱士と听へし有馬新七以下八名は是等
の由を傳へ聞き泉州の所置因循なり逼りて之を
急よせんとして即日大阪を發足し京師に登り来
らんとす其形勢を疾く知りて泉州隨從の藩
士の中より奈良原喜八郎等甲乙は至急し伏見へ
遣はし彼の新七等を遮り禁めし百般説諭せ
しども渠等ハ更し承服せむ互ひの抗論數次よ
募りて終に争鬪ふ及び新七等八名を残りふ
討果され奈良原等が方よ於ても死傷の者尠なり

伏見此驛
舎下有志
の輩大に
抗論を



らも是が為に伏見の驛中大いに恐怖為たりとぞ
 此頃長州侯より東武に在り屢憂國の真意を表し
 て建白し及むると雖も更に採用せざるが故に一日
 不時に登城りて久世閣老に對面せしむるに稟
 出さるや嚮ふも建白致せし如く近年公武の
 間に於て御議論齟齬する所より天下の人心穩りぬ
 らば尤も外國和交に至るも餘義あらば場合も差逼
 りとの御置分るに在るべしれども
 意に反ける儀往々批判する者多く殊更和宮入興の
 後將軍家も速く御上洛在らせしれ
 天機と

窺ひ給ふべき旅夫等の御沙汰ゆきざりし京師を輕
 蔑せしむる不當り旁以て
 皇帝の逆鱗最も甚し
 必隨がの公卿方も憤激一方多しざれば何時討
 幕の勅命を諸侯に下し給えんや夫も又計りがじし
 果して斯の如きに至らば人心沸騰の時と言ひ實に
 て關東の浮沈累卵より毛尚危ふし爰に於て一
 際の御英断を願はしこれと縷々論談し及むれ
 して久世侯大いに恐怖せしむる其英断と宣ふる
 奈何の更候やと問返されし長州侯も黙して有
 無の回答もかく稍姑く久世閣老の面儀睨みたる在

せーが再三詔詔返されさるるあはるば愚意を演説せん
目今急務とある処ハ人才と言ひ且ハまゝ御親戚たる
故を以て越州春松平を元老と一槁殿を補佐となさる
其他正義の面々の廢黜せーを召出されて政事方
用ひられ至急御上洛ありて更ニ列藩と京師と會
國是茲懇議在せられ凡夏の大政ニ関するものハ
朝旨台命を以て令を天下ニ布給せん誰レ公論を
らばと言ふべき是偏へは將軍家の御英斷ニ出
所より憚るも奮然洗除もなく人心御慰撫の御
手段もなくハ豫々薩肥等各藩とも稟一談せし
夏

毛のれば是非なく 叡旨強遵奉し事と計るの
外あり後尚も京師の躰裁を委し知らんと思ハ
れあが家来永井雅樂と言ふ者久しく彼地ニ遣ハ
し彼是探索致させたれば情實多宜く心得たり
御諮詔在りとも苦しかり後返々も前件の旨趣互
しく細評ありしごとく臆々退城せしごとく久世
侯其餘の閣老も面の色強変ぢる迄恐怖做さる人
もたゞ猛可ニ永井雅樂強召し京師の情態を尋問
せし雅樂が演説する所も毛利侯の言をれしより
一層烈しく听へし閣老弥驚歎せられて先づの

雅樂と京師ふ登せ 朝廷向と扱をせんと其旨委任
せられし此人博學秀才とて和漢の事情は通ぶるのこ
う外國の事件は於てハ和議と主とある者なれば事成
幕吏の意は慥ひく引出物なを賜ひしとぞ

○永井が入説調は遂に 勅使東下する支

介程は永井雅樂ハ久世閣老の内旨と受けし四月
十二日東武を発し程なく京師に到りしに議奏
大納言能卿へ参殿し今宇内の形勢は容易
なざるの時節は方り 公武の間御隔意の姿と
成る事憂々敷大事候はばや幕府一端外夷は逼

られ 勅許もいも在らざるは和親交易の條約
張私に結びし条 逆鱗一形ならざるは關東
の所置御取組し破約と為しめ給はんとの御支開ら
其筈の支なれども幕府は於ては外國へ一旦條約
せし事と筋なく破らんとす時を忽ち地兵端を開
くよ至り必然國害を醸まを今寛大の 睿慮は
以て幕府が既往の罪は許され 公武御合體遊を
すれは断然航海開のせられ邦内の人民を
渠が巢穴を探らしめ海外まざるも 皇國の威を普
く興張在らん其時取りとの良計ありて 攘夷鎖港

の論^{かん}に於^おるる國家萬全の策^まは^らず^し後^{のち}其餘^{のち}の更^まを
云^いふと細^{こま}ら^しむ時勢^{の時勢}の得失^{の得失}を説^とふと更^まりて條約^{の條約}の
勅許^{の勅許}を得^えんと為^したや^しこの時既^{の時既}は島津泉州上^{の島津泉州上}
京^{の京}せられし折柄^{の折柄}は攘夷^{の攘夷}の説^の朝野^{の朝野}は奮起^{の奮起}し内外^{の内外}
永井儀^{の永井儀}誅^{の誅}る者^{の者}多く遂^{の遂}は雅樂^{の雅樂}が上^{の上}表^{の表}を御採用^{の御採用}なれ
のみならず^{のみならず}淡却^{の淡却}の毛利君^{の毛利君}侯^{の侯}の首尾^{の首尾}も^も関^{の関}を^を
張^{の張}以^{の以}る在京^{の在京}の長藩士^{の長藩士}等^{の等}渠^{の渠}が入説^{の入説}せし張^{の張}怒^{の怒}り永井^{の永井}
が東武^{の東武}へ飯^{の飯}るよ臨^{の臨}み大津^{の大津}の驛^{の驛}に待受^{の待受}る討果^{の討果}さん
と圖^{の圖}りたる其機^{の其機}を雅樂^{の雅樂}と私^{の私}りみ推^{の推}して中仙道^{の中仙道}を
下^{の下}りし^しら^ら其筋^{の其筋}は恙^{の恙}がなかりし^しら^らと翌^{の翌}年の二月^{の二月}は

至^{の至}り藩士^{の藩士}の議論^{の議論}沸騰^{の沸騰}せし^しら^ら遂^{の遂}は割腹^{の割腹}為^のたりし^しとを
永井雅樂^{の永井雅樂}が辞世^{の辞世}の詩歌^{の詩歌}り^り左^{の左}に寫^{の寫}す

欲報^{の欲報}君恩^{の君恩}業未^{の業未}央^{の央}
即今^{の即今}成佛^{の成佛}非^{の非}我志^{の我志}
自羞^{の自羞}四十四^{の四十四}年^{の年}狂^{の狂}
願^{の願}即^{の即}天魔^{の天魔}輔^{の輔}國^{の國}光^{の光}

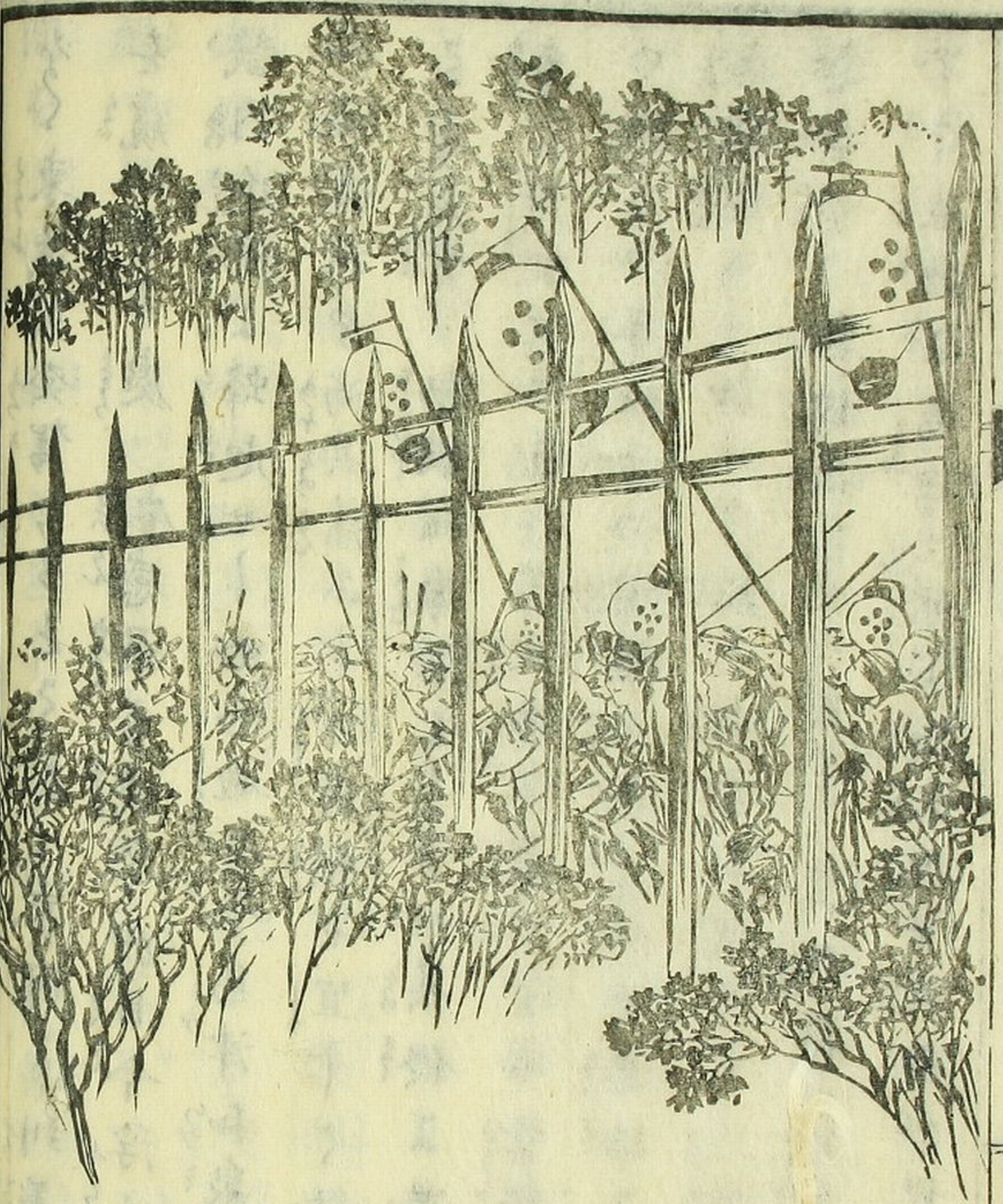
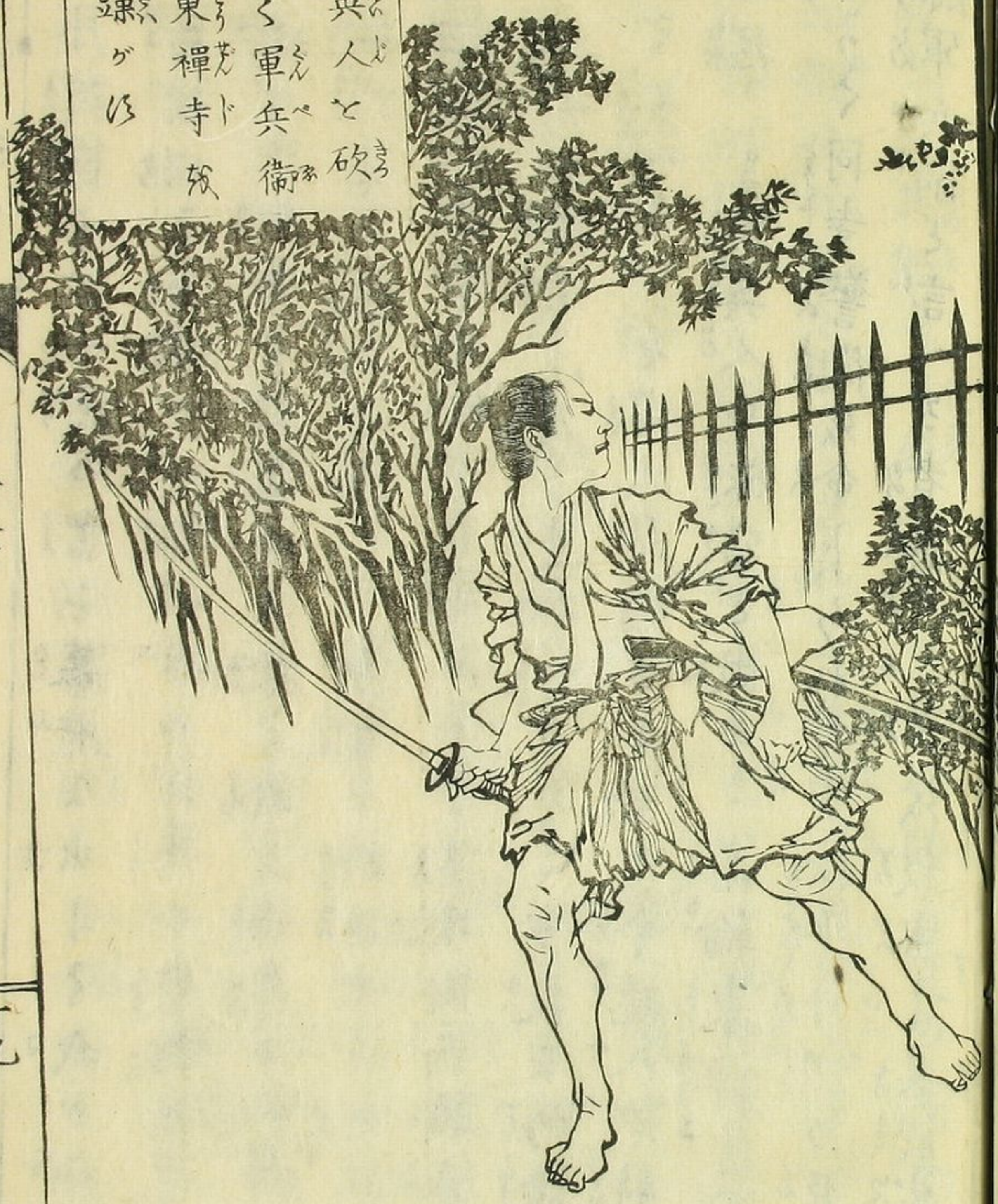
君^{の君}が^の多^{の多}免^{の免}於^{の於}侍^{の侍}者^{の者}を^をゆ^のし^のら^のぜ^の

是^{の是}より響^{の響}し上方^{の上方}より脱藩^{の脱藩}の浪士^{の浪士}蜂起^{の蜂起}せし^しら^ら張島津^{の張島津}
泉州^{の泉州}あ^のを^の鼓^{の鼓}舞^{の舞}し^しら^ら朝廷^{の朝廷}へ直奏^{の直奏}せし^しら^ら杯^{の杯}在京^{の在京}乃^{の乃}
幕吏^{の幕吏}より頻^{の頻}りし^しら^ら関東^{の関東}へ羽檄^{の羽檄}を飛^{の飛}し^しら^ら注進^{の注進}し及^{の及}び
し^のら^の閣^{の閣}老大^{の老大}い^のし^の恐怖^{の恐怖}し^しら^ら既^{の既}に京師^{の京師}の勢^{の勢}ひの斯^{の斯}

の如く一在らんもる必定 勅旨を諸藩に下し幕府の罪状遣責の多く一既長州家の建言も爰の當りたる也人京師の御沙汰在らざる先去る戊午の凶変は幽閑謹慎の人々を宥免の如くなりしとて這回和宮東下せられ婚姻の慶賀を名とて非常の大赦を行はせし仍て四月廿五日郷よ謹慎被りし尾張前亞相殿一橋刑部卿松平春嶽山内容堂その他未々に至るも残らば慎解せらるる一又京師も親王家且つ三公の幽閉を同時解せらるる一とて後長州侯の程

なると東武派癸駕せしとて馳て京師に到着し天機を窺はし一處 叡感最も淺く使目今浮浪の輩は畿内近傍に蜂起せし一過日来島津和泉は鎮靜の御沙汰は尚其藩も力に協せ宜しく鎮撫を策し勅旨 勅諭は蒙らるる一又島津泉州も當今勤王専ら周旋せしとて又島津泉州も當今勤王の野なる事往古の備後三郎高德の忠功に齊しと叡慮斜ありし一馳て和泉派改めし三郎と稱し勅旨 勅諭在らせし一又和泉は面目身も餘り直地は島津三郎と改名も及せられけり此稔

英人と破る
 軍兵衛
 東禪寺
 躁がは



近七糸

三十一

二編卷二

十九

五月英國より一通の書を幕府より出さる我が小笠
 原島根以て日本の所有に在らば英の管轄あるを
 を議せり然れども幕府は於て既に去年十二月水
 野筑州等彼島に遣はし事實を糾正せし如三百
 年前本邦より見出せし島より其頃國民渡來を
 神祠に造営したる支那詳なる故の的證と
 引さる答へしを儲六月朔日に至り今曉八ツ時と
 も思ひし頃英人の旅宿と做せし高輪東禪寺の庭
 上りて同寺警衛に命じられたる松平丹州の臣伊
 藤軍兵衛と言へる者英人二名を殺害し其伴家よ

馳取りて其躬を自殺を遂げ畢ぬ既に支の発せしや
 軍兵衛の所為と知らざれば狼藉者の撃入りしや
 とて早太鼓を打立し衛士等大いに狼狽せしや
 寺中の騒動大形なり然るに軍兵衛は懐中の一
 通の昏と貯へたり其文面の大意は云く這回洋夷
 の警衛と諸侯より命じらるる支前代未聞の珍事とて
 慨するにその限りなれども台命なれば詮方なく総て
 慇懃成旨と做し粗畧なれやう取扱ふに渠等却つ
 て傲慢ふしむ衛士は禮儀失はるるに皇國魂はる
 者の傍觀せしむ堪兼て洋夷を破り自殺せしや

時^{とき}は生^{なま}年^{とし}廿^に三^{さん}歳^{さい}とぞ爰^{こゝ}に至^{いた}りて英^{えい}の公^{こう}使^し此^{こゝ}暴^{ぼう}動^{どう}
の旨^{しめ}趣^{すゑ}を詰^つる幕^{まくら}吏^し軍^{ぐん}兵^{へい}衛^ゑが死^し骸^{がい}と出^いりて厚^{あつ}く之^{これ}
を謝^{あやま}せりと言^いふ是^{こゝ}より先^{まづ}に京^{きやう}師^しに於^おけりて百^{ひゃく}般^{ぱん}
朝^{あさ}議^ぎ在^あらせられし後^{のち}確^{かく}乎^かたる処^{ところ}の睿^{えい}慮^{りよ}貫^{くわん}徹^{てつ}為^なさせ
らるべきと有^ありて大^{おほ}原^{はら}從^{じゆ}三位^{さん}重^{じゆう}德^{とく}卿^{けい}関^{かん}東^{とう}へ 勅^{ちく}使^しと
し下^げ向^{かう}在^あるべし治^ち定^{てい}せし正^{せい}三位^{さん}左^さ衛^ゑ門^{もん}督^{とく}ふ
任^{にん}せられ五月^{ごご}廿^に一^{いつ}日^{にち}ふ京^{きやう}師^しを發^{はつ}途^とりてふ及^{およ}びく最^{さい}も重^{じゆう}
大^{おほ}の 勅^{ちく}使^しなる故^{ゆゑ}島^{しま}津^つ三^{さん}郎^{らう}警^{けい}衛^ゑたり同^{どう}勢^{せい}六^{りく}百^{ひゃく}餘^{じゆ}人^{にん}
とぞ其^{その}頃^{ころ}に關^{かん}東^{とう}少^{せう}も浪^{なみ}士^し上^{じやう}方^{ほう}に蜂^{ちゅう}起^きし京^{きやう}師^しに
逼^{せま}るの聞^{きこ}へりてふを閻^{えん}老^{らう}姫^{ひめ}路^ろ侍^じ從^{じゆう}をりて京^{きやう}師^し取^と

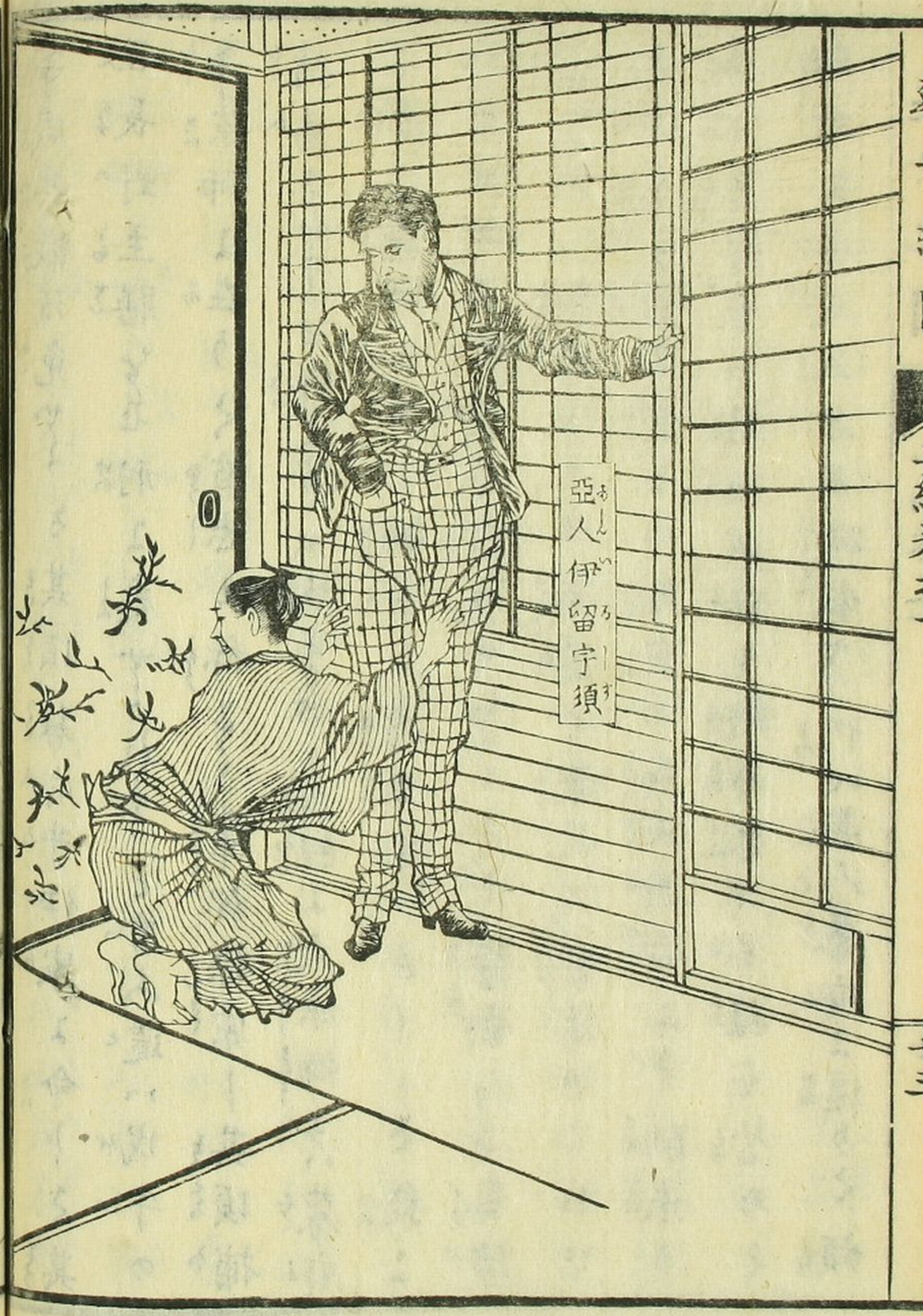
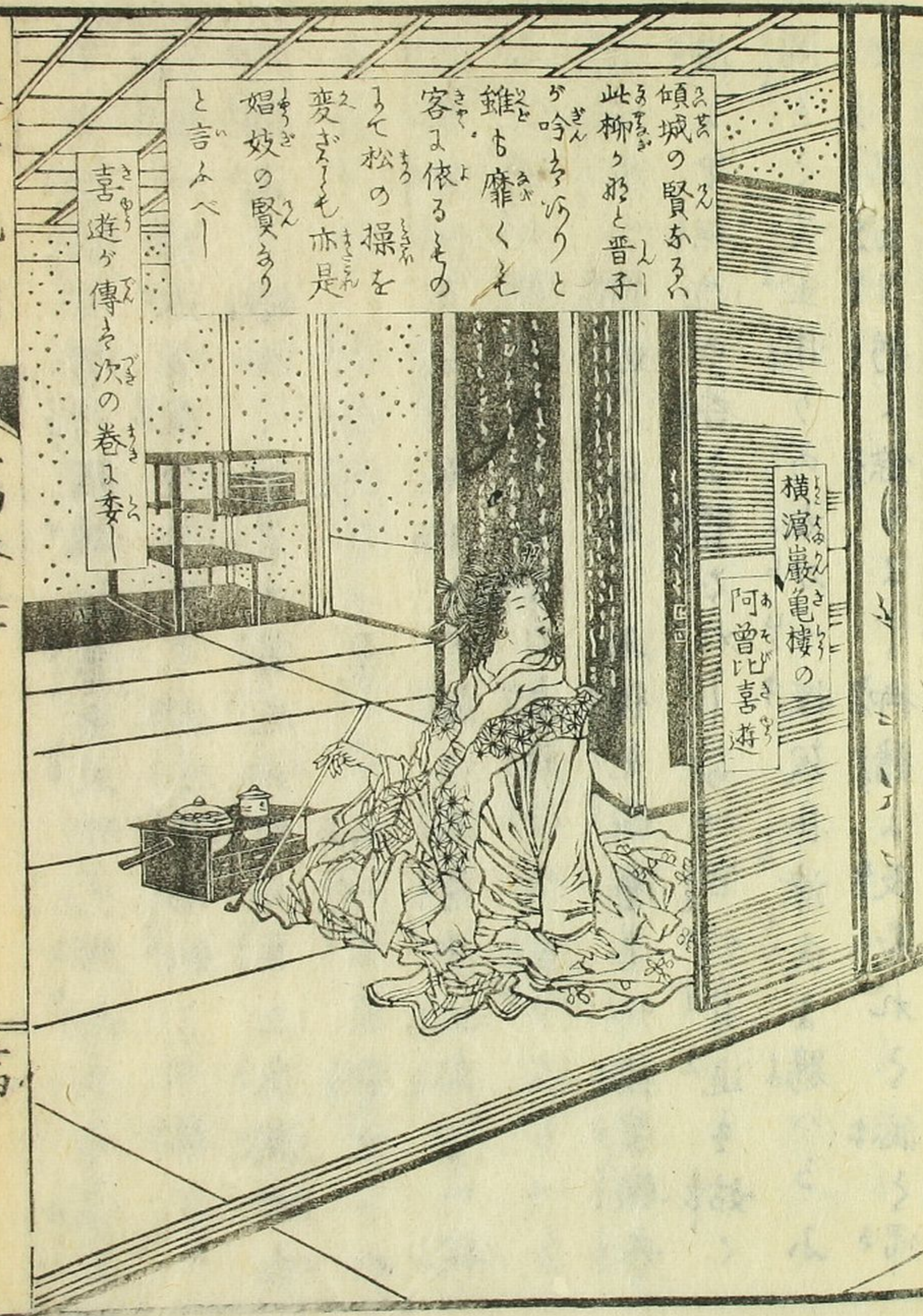
締^ひり死^し命^{めい}とられ此^{こゝ}月^{げつ}十^{じゅう}八^{はち}日^{にち}東^{とう}武^ぶを發^{はつ}し六月^{ごくご}十^{じゅう}
日^{にち}京^{きやう}着^{ちやく}り然^{しか}るに 勅^{ちく}使^し大^{おほ}原^{はら}卿^{けい}と島^{しま}津^つ三^{さん}郎^{らう}警^{けい}衛^ゑ固^こ
し東^{とう}下^げせし其^{その}跡^{あと}に毛利^{もうり}家^け武^ぶ威^ゐ後^ご輝^かりし
京^{きやう}師^しに滞^{ちゆう}留^{りゆう}せらる 形^{かたち}状^{じやう}余^あたりて禁^{きん}裏^り守^{しゆ}護^ごの如^{ごと}く
朝^{あさ}威^ゐの益^{えき}盛^{せい}んたる朝^{あさ}日^{にち}の昇^{のぼ}る勢^{せい}ひりて幕^{まくら}吏^し多^た何^{なん}
れも恐^{おそ}縮^{ちゆう}し在^あるふ甲^{かう}斐^ひたる躰^{たい}たるにぞ姫^{ひめ}路^ろ疾^{しやく}ふ
もあま見^みえり按^おし相^{さう}違^ゐやせりて京^{きやう}極^{ごく}妙^{めう}満^{まん}寺^じ成^{じやう}
旅^{りよ}宿^{しゆく}中^{ちゆう}に姑^こく潜^{ひそ}み居^ゐられけり却^{かへ}説^{せつ} 勅^{ちく}使^し大^{おほ}原^{はら}
卿^{けい}の六月^{ごくご}六^{ろく}日^{にち}に府^ふ着^{ちやく}りて十日^{じゅうにち}に入^い城^{じやう}せりてふ
依^より大^{おほ}樹^{じゆ}公^{こう}の帝^{てい}鑑^{かん}の間^まに 勅^{ちく}使^し成^{じやう}請^{しやう}せりて其^{その}時^{とき}

大原三位殿の威儀改正しく宣らる。其勅意の趣きより嚮より夷鑑渡来の後々戎夷恣に猖獗なせども幕吏の措置するが故より天下騷然として萬民塗炭の苦まんとして依る。睿慮を悩され攘夷の御沙汰在りし其頃幕吏答て曰近來國民協和せざる是を以て膺懲の師を擧るを得ざる願くも皇妹をりて大樹の嫁せしめ給えんといふ。公武一和の御實意露られ天下の人民力と戮せざる夷狄を掃攘せんといふ。故に睿慮最も麗しく請ふに任せしめ和宮を東武へ入興做さるるに豈量らんや奸吏等王家を蔑如し

益外夷と昵し紙厚く一日の安を紙偷んで百年の患ひ来ると知らず不日より夷狄の管轄と被らんを必せしめ以て國民弭紛乱を近頃関西の浪士等大擧し皇駕を函嶺に促し奉り奸吏等と誅罰し一擧に攘夷の事奏せり然るに薩長の二藩之と睿あるに公武を輔翼し攘夷の大體を周旋す是より仍る大樹をも速く小上洛あせしめ公卿大夫と相議り五畿七道の諸侯を令し日たつに攘夷の成功を遂るに以て祖神の宸怒を慰め萬民和育の基ひを開き天下を泰山の安きふ比せんとす第一の豊太

閣の故典に依り大藩を選りて五大老に國政を
 扶け武備を嚴重し夷狄防禦を專らまさん其三
 一橋刑部卿をりて大樹の後見職と依り越前
 中將を元老に任じ幕府内外の政務捕佐せし免
 當は左衽の辱りを受ざらん然るに三事と以
 る徳川曩祖の功業を興し大に綱紀を正しめん
 欲せりとて幕府勅意を奉戴し一橋殿を中
 納言に任じ則ち後見職となし松平春嶽中將を政事
 總裁職に任じ大樹を遠くお上洛せしん其決
 せり爰に至りて久世内藤の兩閣老所司代酒井若州

等咸其職を免せり其頃幕府井伊家に命じ其
 臣長野主膳を刑に處せられしと言ふ這ハ戊午の
 年京師に在りて有志と稱する輩を探索し其頃捕
 縛をさせしと憚らざり故に爾程に大原卿は幕府
 に於て斯の如く勅旨を遵奉せしとて終に
 八月廿二日東武を發遣せらるゝみぞ警衛たる島津
 家より勅使に二日先達と東武を發遣せられ
 武州生麥村に到りて時英の商人馬上みく馳来り
 忽ち島津家の前驅を切る衛卒渠が不禮を咎め
 即時に夷人三名を斃殺せり仍に英人幕府に逼りて頻



予小暴動の所行張謹む幕吏大いよ困迫し遂よ
 贖金の沙汰及べり徳大原三位殿の程なく
 帰洛為し給ひと関東の首尾云云と具奏聞せら
 是のいふ 獻感斜なきぞ其功勞賞せられ
 大原卿へ直衣下させ給ひ又島津三郎の從
 五位下大隅守たるをその条叙任の宣下ゆるべ
 昔関東へ仰達しらしよ後見職慶喜卿總裁職春
 嶽うを拒絶の答よ暨をれしあべ官位昇進を姑く
 閣と黄金作りの太刀一振を島津氏に賜はる小
 三郎面目躬は餘るよ御請よ及をれと臆歸
 國に至らしる其頃土州の藩主豊範ふも折柄登
 京せし是の處 朝廷へ御沙汰と薩長の
 兩藩ハ既よ敏より在京し鎮撫の吏よ努力の
 是小仍其藩ふも姑く京地よ滞在し彼の兩藩
 と侶俱よ國吏よ周旋致すよ旨 仰達しらるる
 勅意の赴きを奉戴せしる河原町の邸よ止り專
 ら盡力のりしは是より諸侯の威望何ると薩長土
 三藩と咸言囉しるをん夫より先よ水戸前中納
 言殿國家の為よ奮發せしれし卓識 獻感あり
 大納言張贈り給ひ故三條内府萬公も國事よ力

を賜されたり。幽閑中、薨し給へば、其功勞を賞せ
 られ、右大臣を贈られたり。備近衛殿公忠、忠 関白
 任ぜられ、九條前関白殿公尚忠、其他千種少將、朝有文
 岩倉少將、朝具 富小路中務大輔、朝直 等、関東の事件
 依り、不始末の支り、赴たりて、落飾の上洛外、
 各閑居せり。斯の如く、江湖の一時變動、
 倣まし、就く、尚種々の奇談りり、并々次の巻に記
 載するを見、之を知らん

近世紀聞二編卷之一終

早稲田大学図書館

011688995975